

審査概要

筆者は、井原西鶴作の浮世草子のうち、好色物に分類される『椀久一世の物語』・『好色一代女』・『色里三所世帯』の三作品に限定して論じている。その理由は、三作の浮世草子すべてが一代記的な作品であり、かつ、主人公の「明」から「暗」への転落の人生を描いた作品であることにある、とする。

それはそれで良いのだが、江戸時代の文学作品の常として、正月に出版するものは祝儀として目出度く納めるのが一般的である。そして、正月に出版される本が多かった。なお、江戸時代の出版事情を説くことがこの文章の趣意ではないので、結論的なことを記す。ここで言う正月とは、前年の十一月末から二月初めを指す。現代の月刊誌の新年号が前年十二月に発売となることを思い浮かべてもらいたい。話を戻して、例えば、西鶴の『好色五人女』の最終話「おまん源五兵衛」も、実際は悲話であつたらしいのだが、末尾で二人は金銀財宝を手に入れ、目出度し目出度しで終わっている。

取り上げる三作の浮世草子出版時期が、正月なのか、正月でないのか。つまり、出版時期が正月であるならば、なぜあえて「暗」で終わる話を書いたのであろうか、といったことの理由についても配慮する必要があつたのではなかろうか。また、正月でないならば、筆者の関心外のこととはなるかもしれないが、当時の出版事情の本流から外れた時期の出版物を取り上げる理由についても、触れて欲しかった。

第一章では、『椀久一世の物語』を取り上げている。

第一節「主人公の人物像」において、「「むしやうといふ男」（上巻）と「狂人」（下巻）とでは、「判断・分別」の異常性、「狂気」の程度が異なることは言うまでもない」と書いてあるが、どのように「異なる」のかを屢述しないことには読者には理解しがたい。また「わづか有銀七百六十貫目余」と、西鶴の『日本永代蔵』の記述により「わづか」としているが、世間一般から言って銀七百六十貫目（金一両＝銀六〇匁、金一両＝二〇万円とすると二五億三〇〇〇万円以上）は、「わづか」なのであろうか。大富豪ではないにしても大金持ちであることに違いあるまい。

次に、第二節では、「倒錯」というキーワードが頻出するが、一般に用いられる「倒錯」という語の意味とは微妙に異なっている。テクニカルタームとして用いるのなら、厳密に規定すべきであろう。

第一章を読んで、筆者が『椀久一世の物語』を綿密に筆者流に分析していることは分かるが、残念ながら、この論文からは、『椀久一世の物語』の面白さ、どこが面白いのか、といったことは伝わってこない。

第二章では、『好色一代女』を取り上げている。筆者は『好色一代女』を、よく言えば構造論的に取り扱っている。この章でのキーワードは「モチーフ」であるが、長尾三知生氏と森耕一氏の論に引き摺られ、論理をもてあそび、捏ね繰り返しているような感を持つ。両氏の論は論として、筆者独自の構造論的な読解ができなかったであろうか。このこと

を残念に思う。『好色一代女』は、どこまでも懺悔物なのである。

長尾、森の両氏の論に振り回されたあげく、第四節末では、到頭、「『好色一代女』は何も生み出すことのないエピソードが、始章から終章まで延々と続く作品であると言える。」との記述がなされている。しかしそれでは、『好色一代女』は何の取り柄もない作品ということになってしまう。西鶴も立つ瀬がないのではないだろうか。

両氏に引き摺られたため、それまでさんざん「モチーフ」というキーワードが用いられているが、第六節で「当該モチーフ」と記載されても、具体的な概念が想定できないのである。その上、第六節末でも、「作品を通読すれば、性を過剰なまでに追求する人物に勝者も敗者も存在しない。」との記載がなされている。西鶴は、この作品において、「性を過剰なまでに追求する人物」の勝負を描くことを企図したのであろうか。

私としては、筆者自身の『好色一代女』の読解を知りたく思う。

最後に、第三章では、『色里三所世帯』を取り上げている。この章でのキーワードは、「執心」である。ただし、この詞の定義も私の理解との間に擦れがある。第二節に、「筆者がここで言う執心とは、欲求不満の意であって主人公の性格における特性とは意味が異なる。」と記している。だが、「執心」とは「欲求不満の意」とはなり得ない。辞書を引けば、「何かを手に入れたく思い、それが心から離れないこと」とある。この一文にはまだまだ問いたいことがあるが、それは略して、『色里三所世帯』という作品では、「執心（執着）」とは「執念」の意であらう。

第六節に、「執心・性から逃避した直後に、持ち前の性力・財力を用いた盛大な遊興をすることによって、その失態を隠匿している節がある。」とあるが、具体的にはどんな「節」なのか、曖昧である。付言すれば、「隠匿」とは、「隠しておいてはいけない物や人を、隠しておくこと。」であるので、これは誤用である。「隠蔽」（見られたり、知られたりしては困る物や事を、意図的に隠しておくこと。）である。

この章では、五段構成について、もっと厳密に鋭く追究すべきであったと思う。

総論としては、より一層構造論を推し進めるべきであったと考える。さすれば、読み応えのある論文になったと想定できるだけに、惜まれる。

題目に、「西鶴浮世草子の好色物における主題とその表現方法」とあるところの「表現方法」について、筆者は書き記したつもりかもしれないが、未熟であった。厳しい表現になるが、ほとんど書いてないに等しい。これについても、より深く掘り下げて欲しかった。ただし、今までさほどされてこなかった構造論を、研究の方法として用いたことは、大層有意義なことである。よって「可」とする。

最後に、論文提出が切羽詰まっていたことは、目次の第三章第六節が抜け落ちていることなどからも想像できる。いつも締め切り間際まで何もしない私が言うのも何だが、今後は、すべて余裕をもってことに当たって欲しい。

同様のことは、文章を書くに当たっても言える。コピーして書いているとまでは言わないが、同じ表現の文章が繰り返し出てくるので、文章が単調になり、読んでいて飽きが出る。文学に志し、携わる以上、繰り返し読み直し、推敲し、達意の文章を書いて欲しい。さらに言えば、筆者が使用する詞の意味が、私の理解、おそらく世間の人々の理解ともさほど変わらないと思うが、との間に隙間があるように感じる。絶えず辞書を引くようにして欲しい。

要望ばかり記したが、修正の余地があるからこそ書いたのである。心して欲しい。